

平成 28 年度国土交通白書有識者インタビュー



平成 28 年度国土交通白書では、「イノベーションが切り拓く新時代と国土交通行政をテーマとし、我が国が抱える少子高齢化、人口減少、激甚化する災害、老朽化するインフラ等の課題解決と、持続可能な経済成長のカギとなるイノベーションの創出と社会実装への課題をあげるとともに、イノベーションにより産み出される未来の社会を想像している。

今回は、国民が期待する未来社会を考察する際に、アドバイスをいただいた、千葉市科学館の野副晋氏より、イノベーションの創出そして社会実装の課題を中心に、子供たちへの教育的な視点を含め、白書に関するご意見をいただきました。

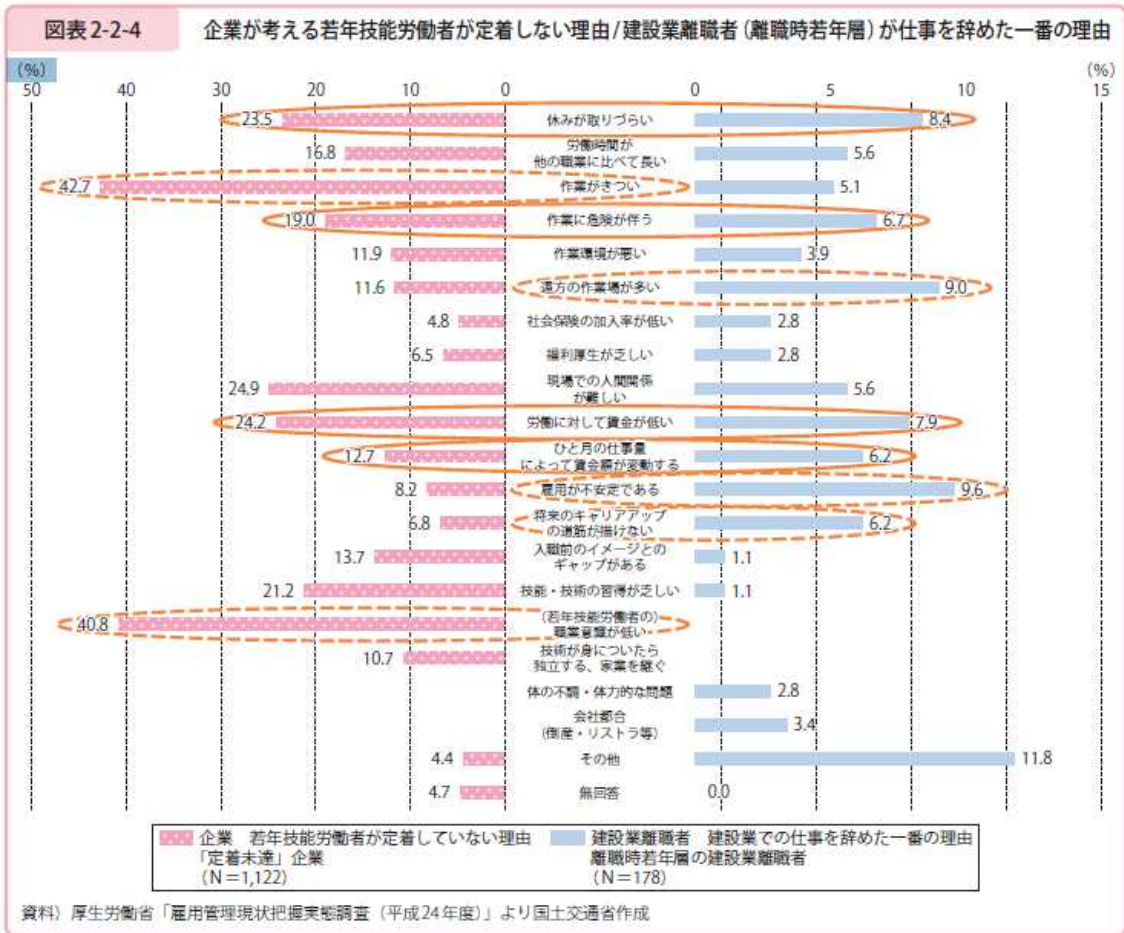
平成 28 年度国土交通白書をお読みになられた率直なご感想をお聞かせください。

交通分野や土木分野は、効率化・省力化がイノベーションとされるので、「今までなかったものが出てくること」「できなかったものができるようになった」ことを一般の人が考えるイノベーションの定義とすると、国土交通省の分野におけるイノベーションとはどういったものか、はじめは掴みづらいのではないかと思います。しかし、白書を読んでみてその認識が誤りだったと思いました。現場の人の働き方やインフラ整備などについて、イノベーションが今後もさらに行われる可能性を感じました。

一方で、国土交通分野のイノベーションはアイデアや技術開発だけでなく社会の認知や法整備の必要も出てくる面が難しい点だと思います。

個人を対象とした国民意識調査について、結果をご覧になって関心を持たれた視点やご意見をお聞かせください。

「ギャップ」というものを感じました。これは国民意識調査ではありませんが、たとえば企業が考える若年技能労働者が定着しない理由と、建設業離職者（離職時若年者）が仕事を辞めた理由の調査で、企業側は作業がきついためと考えている一方、労働者側はそう思っていない点。このようなズレは課題であり、クリアしていかなければならないと思いました。



また原則自動走行となり交通インフラの整備が進展した場合に、自家用車がなくてもサービスが比較的受けやすい三大都市圏居住者でも自家用車を欲している点等、ニーズと提供側の認識に「ギャップ」があると思いました。

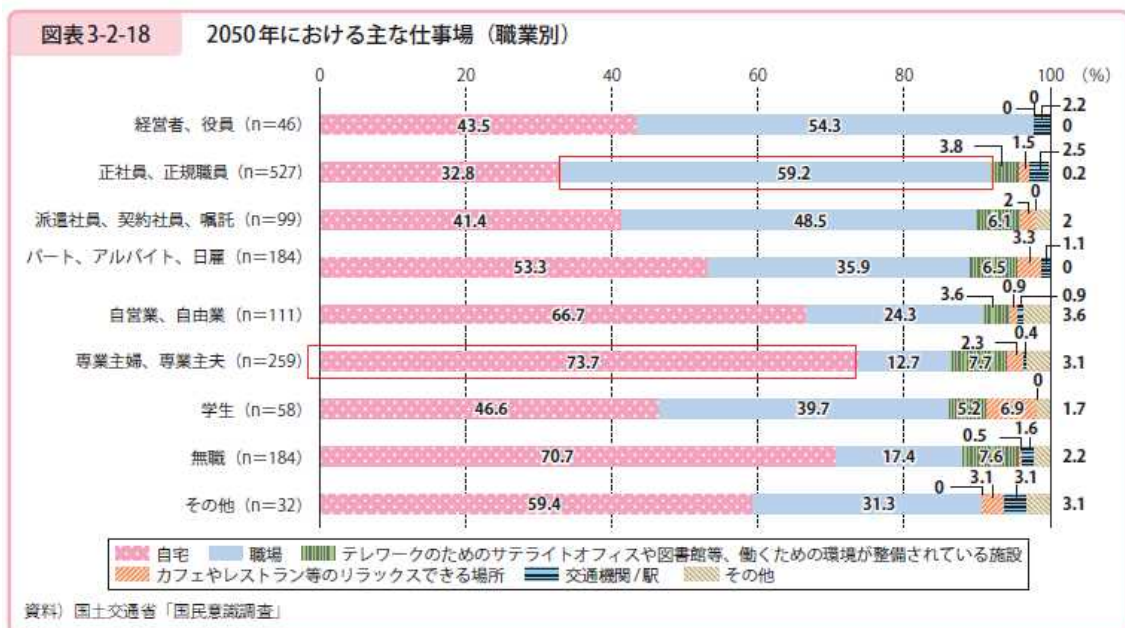


回答者の状況(自動運転に関する質問について回答者が運転免許を持っているのか否かや、日常的に運転しているかなど)によっても、回答した背景にある価値観が変

わってくると思うので、回答した理由の分析もあるとよかったですと思います。そのような価値観の違いを埋めるという観点から制度や法整備について考えるべきではないでしょうか。

ほかにも、2050年における主な仕事場の希望で、自宅を希望する人が多い結果について、役員や経営者の人々も自宅働きたいという結果に、純粋にこの結果をどうとらえればよいのか関心を持ちました。テレワークにより、自宅でテレビ会議に参加したことがあります。自宅に仕事場としての機能がないため、テレビ会議の画像に生活空間が映るなど、プライバシーの問題があると思いました。またメールだけでは解消できないコミュニケーションの課題もあり、テレビ会議で言えば、会議参加者の息づかいなど大切なことがあると思いました。テレビ会議の画像に仮想現実を取り入れる等、一つの場所に集まって会議をしている臨場感があれば、会議に集中でき、効率が上がるかもしれないと思います。このような技術を導入することでの経済効果が目に見えれば、受け入れられることもあるのではないのでしょうか。

イノベーションの社会実装を促進するためには、イノベーションの本質の善し悪しを判断できる入り口を大きくすることが大切であると思います。新しいカテゴリーの普及の際には、一般の人たちがネガティブ要素に敏感になることがあるので、メリット・デメリットを広く認知させ、判断するための情報が必要であると思います。



白書で紹介している国土交通行政に関わるイノベーションにつながる取組事例について、特に関心をお持ちになった事例についてお聞かせください。

すでにあるものをグレードアップするイノベーションについては、そのメリットがよほど大きくないと、プライバシーや安全面の懸念を払拭できません。自動運転について、一般の人のとらえ方として自動運転のメリットが、運転が楽になるというだけだと、安全性や嗜好性から普及しないのではないかと等いろいろな観点があります。政

府などが能動的に選択肢を提示して国民に判断させるべきではないでしょうか。

ほかには、これは国交省の取組みではありませんが、コラムにある月島荘が印象に残りました。さまざまな企業の社員が入居する社員寮ということで、機密情報やコンプライアンスについてどのようにバランスをとっているのかといった点が気になりました。

国土交通分野でのイノベーションを創出し、社会実装を促進させるための課題として、オープンイノベーション、オープンデータの活用についてご意見をお聞かせください。

前述の月島荘の取組みを見て、オープンイノベーションの場があるだけでなく、そういう場で普段から情報のアンテナを張って、他人とコミュニケーションをとるスキルも非常に重要だと思いました。雑談をする空間や時間をとるなど、働く環境のイノベーションがもっとあってもよいのかなと思いました。

日本科学未来館に勤務していた時に、本田技術研究所のパーソナルモビリティ UNI-CUB の実証実験を共同で行いました。それには信頼関係が必要不可欠でした。信頼関係を築けたからこそ、まだ世に出ていない研究開発中のモビリティを使って、一般の方々を対象に実験を行うことができました。信頼関係の構築は容易なことではありませんが、オープンイノベーションを広めるうえでますます重要になってくると思います。

またオープンイノベーションに取組みたくてもどこも提携すればいいのかわからないということが多く、中継をする第三者がまだ少ないのではないかと思います。

国土交通行政に限らず、今後もイノベティブな人材が求められていくと予想されますが、将来を担う子供たちとの関わりの中で人材の育成という点で大事にされていることがありましたら、おしえてください。

今進められているプロジェクトをうまく要約して子供たちに見せるのが我々の役目です。子供たちは、展示されている技術は自分たちが大人になれば完成しているものだと思いがちなので、技術の完成までのロードマップを伝えるようにしています。ロードマップを伝えると、過程にあるクリアしなければならない必要な技術にも興味を持ってもらえます。またプログラミング的思考を身につけてもらうために、自分で課題を見つけ、トライアンドエラーをする試行錯誤の場を科学館では設けるようにしています。わたくしの子供のころに比べて、そのような経験を積む機会が少なくなっている気がします。

新技術に関する展示で、特に実証実験段階のものはぜひ伝えたいのですが、一方で不安定な要素も多いため、ある程度お客さんに見せることができるクオリティーとどうバランスさせるかというジレンマを抱えています。子供たちには結果だけではなく将来の可能性を感じる機会を増やすことによって、イノベーション人材に育っていい

てもらいたいと思います。

新技術に関する情報発信について、科学館だけでできることには限りがあります。われわれも積極的にアプローチしますが、研究者や技術者の方々にも実証実験や情報発信の場として科学館を積極的に活用してもらえたらと思っています。ただ、それには人手や資金が足りないという課題もあると思うので、今後はプロジェクトへの人材面や資金面の支援が厚くなることを期待します。細分化された知識を極めるだけでなく、幅広い視野と他との繋がりを持つことで、イノベーションは更に産まれていくと感じています。

以上